

## 5. 友連をなくして

高遠町三義小学校芝平分校六年 S・A

きょうもまだ雨がふり続いていて、まるでバケツの水をぶちあけたようだ。川はどす黒くにごって、今までも二倍も三倍もふえて、一本の恵まのおびのように道をながして、田をくずして、流れをいく。道にあふれたりした。山は巨人がっめどひっかいたようにくずれた。

おとなの人はカッパや、みのをきて田や畑を見に行った。がラス戸はがたがたゆれて、木はいまにもおれどうになつて曲つてゐる。ぼくはなかなかおれなかつた。あしたは、かいこ休みが終つて、学校へいく日だ。ぼくは雨がやめばいいなあと思つて目をこじらした。

朝五時ごろふと目がさめた。となりのおばさんのあわてた声がかきこえた。支所がつぶれて、T君とSさんが、生きうめになつたので、はやくきこくわつた。Lと言つた外に出ない。

ぼくは信じられなかつた。きのう買物にいったとき、いきあつた。T君へT君(K君)が死んだなんて、ぼくはからだ全体が、こうつましまいどうに寒くなつた。

いまもたつたもいらぬなかつた。居間にいくと、とうさんがおかけるところ

だった。

朝ごはんをたべているとき雨はやんだ。

「きょうはこういうことがあったので休みだ。トというしらせがきた。ぼくは支所へいくとちゆう、T君のことを考えながらいそいそいって。道には雨のおつたあとがけ。きりのこつていた。」

支所へいっまみるとおむせいきまいた。家が県道のほうにたおれそうになつて、こうかん台（電話交換台）のあったところなび、上にうまつていた。家もうら山の土に半分ぐらいうまつてしまつた。家のまわりも中もへんなにおいでいっばいだつた。

中にはいると、はしらはたおれて、いろいろ売るところはめちやくちやにさか、がラスまどはこわされ、なんともいえないほどめちやくちやになつていた。中にはいってたん、T君と遊んだこと、けんかしたことがわき出まくるように思いだされた。

ぼくは外にぞた。そして学救のほうにとんぞいって。ただむちゆうではしつた。頭の中はT君の思いで、いっばいだつた。ただむちゆうではしつた。

その夜はろくにねむれなかつた。なんであんなになかよしだつたのに、死んでしまつたのだらう。T君のことを考えながら目をつぶつた。

よく日はT君のどく式だつた。みんないっしょに学救を出る峠にいった。さいごのT君の顔を見たとき、思わず目の上があつくなつた。おはかにいけたとき、ぞつと土をきせまやつた。かえりにT君のおかあさんが、帳めんを

くれた。この帳面を丁君だと思つて、いつまでものこしておきたいと思つた。

(三十八年)